大船渡で椿と出会う

Meet Tsubaki in Ofunato

椿【tsubaki】とは

ツバキ科ツバキ属の常緑中高木です。学名を「Camellia Japonica」と言い、日本原産の植物です。ツバキ属にはヤブツバキ、ユキツバキなどの種がありますが、江戸時代には野生種から園芸品種が多く作られ今では2,000種にも。18世紀以降欧米に渡り、華やかな西洋椿が作られました。品種は、現在全世界で6,000種以上にものぼっています。

大船渡と椿

大船渡市はヤブツバキの北限の地で、市内の至る所にヤブツバキが自生しており、「椿の里」と呼ばれています。また、椿は市の花に指定されており、まちのシンボルとなっています。

三面椿

末崎町中森の熊野神社境内にある樹齢1400年、日本最大・最古と言われているヤブツバキは、境内の東、南、西の三面にあったことから「三面椿」と呼ばれています。

※詳しくは11頁「三面椿のこれまで」と「これから」へ。

碁石椿園

碁石海岸・大浜を臨む碁石椿園は、ヤブツバキをはじめとした約1000本の椿が植樹されています。高台にある東屋からは赤・白・黄色などさまざまな色に咲き乱れる椿とリアス海岸の美しい景色を堪能できます。

世界の椿館・碁石

「世界の椿館・碁石」は椿を展示する屋内施設としては国内最大級であり、日本だけでなく、世界13ヵ国約550種類700本もの椿を一堂に堪能することができます。特に椿が見頃を迎える1月下旬から3月下旬にかけては、百花繚乱の世界が広がります。また、地域で生産された四季折々の植栽展示のほか、椿の苗木、椿グッズ、椿油などの販売も行われています。開花期には「三陸・大船渡つばきまつり」が開催されます。

椿館の館長・林田勲さんに今後の椿館について伺いました。

林田館長「平成9年の開館から20年以上が経ち、来場者の方々にさらに椿を楽しんでいただくさまざまな取り組みを進めたいと考えております。特に〝体験型〟のプログラムに力を入れ、その第一弾として大型の搾油機の導入が決まりました。今後は搾油体験を楽しめるようになります。」

Kesen × Tsubaki

気仙と椿の関わり

気仙の人々は、古くから椿とともにある暮らしを営んできました。
文献や伝承から垣間見えるその歴史を紐解いてみましょう。

気仙椿の歴史と習慣

気仙地方（大船渡市、陸前高田市、住田町の3地域で構成）は、岩手県の中でもヤブツバキが多く生息している場所として知られています。

昭和6年に刊行された農林省山林局編の『椿及ビ山茶花ニ関スル調査』には、当時の岩手県における椿の分布地について、沿岸部では南部の気仙地方に最も多く自生し、海抜100メートル位まで生育し、主に屋敷周り、畑の畦畔（けいはん）、また山林に多く見られることが記されています。椿は生育良好で、果実を採取し製油の材料に供されていました。また、昭和24年に林野庁の掲げた椿の主な生産地の1つに岩手県気仙郡広田村（現陸前高田市）も挙げられています。

採った油は食用をはじめさまざまに利用されました。油は1年間で1軒あたり一升瓶で約3～4本分取れ、けんちん汁、天ぷら、なべやき、魚料理にも使用していました。

気仙地方には日本四大名工の一つと言われる気仙大工が活躍し、彼らはノミやのこぎりが錆びないように椿油を使用していました。お寺の祭壇に置かれている燈明（とうみょう）（神仏に供える灯火）を灯すためにも椿油を使用し、また、山火事が周辺のお寺や山々へ延焼することを防ぐ防火林（椿は葉に水分が多い常緑広葉樹のため）として椿を植えていたと言われています。

木製の搾油機

昭和初期頃まで、多くの集落では木製の搾油機を使用していました。種を搾油機に入れる前に、杵（きね）と臼（うす）で細かく砕き（写真1）、砕いた種を30分程蒸し、その後蒸しあがった種を圧搾することで椿油を抽出していました。

木製の搾油機にはいくつかのタイプがあり、棒の両端を持ち回すと種に圧力がかかる万力方式のもの（写真2）や、木に紐を巻きつけ回すことで圧力を加える大型のもの（写真3）などがありました。

写真3

写真2

万力方式の搾油機。圧力がかかることで椿油が抽出される。

写真1